

かの江戸川乱歩の推理小説「怪人二十面相」風に書けば次のようになるであろうか？

ある時は 韓国からの亡命者として日本に上陸し

ある時は 日本社会にどっしりと根を下ろし、決め細やかな人的ネットワークを形成した

あるいは

ある時は 日韓関係史の研究者として万巻の書と資料に埋もれ

ある時は 日韓両国の政界を水面下でつなぐフィクサーとして活躍した

あるいは

ある時は 敬虔なカトリック信者としてキリストに祈りを捧げ

ある時は 赤坂の韓国クラブに夜な夜な出没して、杯を乾す

日韓談話室の皆様方にはおそらく説明の必要はないのではあるまいか。

院長が韓国の政治抗争に巻き込まれて、米軍機で日本に飛来、亡命のような形で日本に入国した—と言うのは橋本明さんのお話にもあった。

だが、それからの院長は日本の政界、経済界、学会、宗教界などあらゆるところに、ネットワークを展開し、知り合った人々と親しく交わっている。

初来日から程なくして、国会図書館、外交史料館、大学図書館などに通いつめ、主として日韓関係の歴史についての資料を読み込んだ。

さらには、神田の古書店街にもしばしば出かけ、これぞという書物、資料は金に糸目をつけず買い集めた。中でも、韓国独立運動の英雄安重根については文献だけでなく、その遺墨を沢山収集してきた。さらに、安重根の遺体を何とか発掘しようと、韓国政府の調査団の責任者を引き受けている。

独立運動関係では、大逆事件の一つ桜田門事件の李奉昌の裁判資料を最高裁に乗り込んで複写することに成功した。李奉昌は昭和七年、昭和天皇の暗殺を試みて爆弾を投げつけたことで処刑されている。

問題意識の領域は独島（竹島）問題、モンゴル、歴史的地図の収集などにも広がっている。

その一方で、日韓の両国の政治・外交面での水面下に於けるフィクサー的役割も果たしてきたという説もある。とりわけ、朴正熙大統領と親しく、日本では自民党政治家とチャネルがあつたことが背景にあるようだ。

一時は日本の新聞で、韓国政府の資金が院長の研究院に流れている——との記事も掲載された。

また在日韓国人作家李恢成氏の作品のなかでは、院長をモデルに使ったのではないかと思われる人物も登場してくる。

院長が敬虔なカトリック信者であることも、よく知られている。

洗礼にあたり院長がゴッドファーザー（代父）役を勤めている。代父はカトリックの世界では「親も同然」という重要な役割なのである。

だが、その一方で、かつては赤坂の韓国クラブで、夜な夜な友人と酒を酌み交わしていた。

崔書勉韓国研究院院長（かつての研究院の名前。以下院長）の実像は極めて捕らえにくい気がする。知り合って三十年足らずになると思うが、今日尚、その実像にはなかなか迫ることができないような気がする。無論、山下の知力の足らざるが故でもあるが、同時に院長の幅広く、柔軟な、包容力ある性格もこれまた、その一因かも知れない。

改めてこれまでの院長の姿、顔、言葉を思い出しながら、この稿を起こしつつ感じる次第である。

山下が院長と初めて知り合ったのは一九八六年のアジア競技大会（ソウル）開催の頃のことであった。

職場の先輩である西村多聞さんのご紹介であった。山下が日韓記者交流という制度で韓国に派遣されることになったので、西村さんから「訪韓の前にあつておいた人が良い人がおられる」とご紹介いただいた。その場はどこかの韓国料理店であつたような気がする。

記者交流制度というのは日韓の外務省が両国記者の相互訪問により相互理解を深める——と言うのが狙いのプログラム。一週間程度相手国に滞在し、政府高官のレクチャー、外務大臣表敬、工場見学、観光などが主要メニューであつた。山下は初の外国旅行、初の韓国訪問とあつて。韓国への知識はほとんどなかった。

学生時代にトライした韓国語学習は挫折し、無論会話は出来ない。

初めてお会いした時の院長について山下はそのバックグラウンドをよく存じ上げなかつたこともあり、もっぱら院長のお話を聞いたように思う。

だが、驚いたのは山下がソウルについてからである。

ホテルに電話があり、ある夜、食事がしたので漢江のほとりのお店に来てくれとのこと。出かけてみるとそれは「真味」という韓国式高級料亭である。

しかも当時の韓国外務省の権アジア局長もおられた。いわば山下の招聘元ともいうべき方であつた。

一夕ご馳走になつたが、山下と食事をするためだけにソウルに飛んだのか（当時は東京滞在期間のほうが長かつた）、それとも別の用事があつたのかは山下にはわからなかつたが、その行動力には舌を巻いたものであつた。以来、折にふれてお会いし、様々な事柄についてご教示を頂くようになった。

いや、怪人二十面相にもたとえられる多様複雑な側面を持つ院長の実相をあれこれ詮索することはあまり意味がないかも知れない、それよりも、むしろ江戸時代前期の元禄期の人形浄瑠璃・歌舞伎の作者近松門左衛門（ちかまつ

もんざえもん1653年ー1655年1月9日)の「虚実は皮膜の間にあり」という有名な言葉を挙げておきたい。これは「物語の、あるいは物事の真実は虚と実の間にある」という意味である。

つまり、近松の筆法を持ってすれば、院長の真実は様々な「貌(かお)」「の間にあるとでもいえようか？」さらに言えば、院長の伝説と真実の間はどこかにこそ、本当の姿があるというのだ。

さらに、山下は一つの願いを持っている。

それは、院長にカトリックの総本山バチカンの大幹部の枢機卿になつていただくことである。

韓国、日本のカトリック界への貢献、深い信仰などからして十分にその資格はお持ちだと信じている。

無論、枢機卿就任には定数、年齢制限などありなかなか困難なことも承知している。

だが、この法王庁には「抜け穴」があるというではないか。

それをたどれば、実現は可能なのではあるまいか？